

みにくいアヒルの子

(ハンス・クリスチャン・アンデルセン)

いなかは、ほんとうにすてきでした。夏のことです。コムギは黄色くみのつていますし、カラスムギは青々とのびて、緑の草地には、ほし草が高くつみ上げられていました。そこを、コウノトリが、長い赤い足で歩きまわっては、エジプト語でぺちやくちやと、おしゃべりをしていました。コウノトリは、おかあさんから、エジプト語をおそわっていたのでした。

畑と草地のまわりには、大きな森がひろがっていて、その森のまんなかに、深い池がありました。ああ、いなかは、なんてすばらしいのでしょうか！そこに、暖かなお日さまの光をあびて、一けんけんの古いお屋敷がありました。まわりを、深い掘割ほりわりりにかこまれていて、へいから水ぎわまで、大きな大きなスカンポが、いっぱいしげっていました。スカンポは、とても高くのびていましたから、いちばん大きいスカンポの下では、小さな子供なら、まっすぐ立つこともできるくらいでした。そこは、まるで、森のおく深くみたいに、ぼうぼうとしていました。

ここに、アヒルの巣がありました。巣の中には、一羽のおかあさんのアヒルがすわって、今ちようど、卵をかえそうとしていました。けれども、かわいい子供は、なかなか生れてきませんし、それに、お友だちもめつたに、あそびにきてくれないものですから、今では、もうすつかり、あきあきして

いました。ほかのアヒルたちにしてみれば、わざわざ、このおかあさんのところへ上っていったら、スカンポの下におとなしくすわって、おしゃべりなんかするよりも、掘割りの中を、かっさに泳ぎまわっているほうが、おもしろかったです。

とうとう、卵が一つ、また一つと、つぎつぎに割れはじめました。ピー、ピー、と、鳴きながら、卵のきみが、むくむくと動き出して、かわいい頭をつき出しました。

「ガー、ガー。おいそぎ、おいそぎ」と、おかあさんアヒルは、言いました。すると、子供たちは、大いそぎで出てきて、緑の葉っぱの下から、四方八方を、きよろきよろ見まわしました。そのようなすを見て、おかあさんは、みんなに見たいだけ見せてやりました。なぜって、緑の色は、目のためにいいですからね。

「世の中って、すごく大きいんだなあ！」と、子供たちは、口をそろえて言いました。もちろん、卵の中にいたときとは、まるでちがうのですから、こう言うのも、むりはありません。

「おまえたちは、これが、世の中のぜんぶだとも思っていないのかい？」と、おかあさんアヒルは言いました。「世の中って、このお庭のむこうのはしをこえて、まだまだずうっと遠くの、牧師ぼくしさんの畑のほうまで、ひろがっているんだよ。おかあさんだつて、まだ行ったことがないくらいなのさ！——ええと、これで、みんななんだね」

こう言って、おかあさんアヒルは、立ちあがりました。「おや、まだみんなじゃないわ。いちばん大きい卵が、まだのこっているね。この卵は、なんて長くかかるんだらう！ほんとに、いやになっちゃうわ」こう言いながら、おかあさ

んアヒルは、しかたなく、またすわりこみました。

「ちよいと、どんなぐあいかね？」と、そのとき、おばあさんのアヒルが、お見舞いにきて、こうたずねました。

「この卵が、一つだけ、ずいぶんかかりましてねえ！」と、卵をかえしていた、おかあさんアヒルが、言いました。「いつまでたっても、穴があきそうもありませんの。でも、まあ、ほかの子たちを見てやってくださいな。みんな、見たこともないほど、きれいなアヒルの子供たちですわ！ おとうさんにそっくりなんですよ。それなのに、あのしょうのない人ったら、お見舞いにもきてくれないんですの」

「どれ、どれ、その割れないという卵を、わたしに見せてごらん！」と、おばあさんアヒルは、言いました。「こりゃあね、おまえさん、シチメンチョウの卵だよ。わたしも、いつか、だまされたことがあってね。そりゃあ、ひどい目にあつたもんさ。生れた子供には、さんざん苦労させられてね。だって、おまえさん、その子ったら、水をこわがるんだからね。いくら、水の中へ入れてやろうと思つたつて、だめだったよ。どんなに、わたしがみがついて、つつつこうと、食いつこうと、そりゃあ、どうしたつて、だめなのさ！ ——その卵を見せてごらん。ああ、やっぱり、シチメンチョウの卵だよ！ こりゃあ、このままにしておいて、ほかの子供たちに、泳ぎでも教えてやるほうがいいね」

「でも、もうすこし、すわつていてみますわ」と、おかあさんアヒルは、言いました。「せっかく、長いあいだ、こうやってすわつていたんですもの。もうすこし、がまんしてみます」

「まあ、お好きなように」おばあさんアヒルは、こう言つて、

行つてしまいました。

とうとう、その大きな卵が割れました。ピー、ピー、と、ひよこが鳴きながら、ころがり出てきました。ところが、その子つたら、ずいぶん大きくて、ひどくみつともないかつこうをしていきます。おかあさんアヒルは、その子をじいとながめて、言いました。「まあ、とんでもなく大きい子だこと！ ほかの子には、似てもいやしない！ こりゃあ、ほんとうに、シチメンチョウの子かもしれないよ。まあ、いいわ。すぐわかるんだもの。ひとつ、水のところへ連れてつて、つきとばしてやりましょう」

あくる日は、すっかり晴れわたつて、とても気持のよいお天気でした。お日さまは、キラキラとかがやいて、緑のスカンポの上を照らしています。おかあさんアヒルは、子供たちをみんな連れて、掘割りにやつてきました。パチャーン！ と、おかあさんは、まっさきに水の中へとびこんで、「ガー、ガー。さあ、おいそぎ！」と、みんなに言いました。すると、アヒルの子供たちは、一羽ずつ、あとからあとからとびこみました。水が頭の上までかぶさりましたが、みんなは、すぐに浮び上がつて、じょうずに泳ぎ出しました。足は、ひとりでに動きました。こうやつて、みんなは水の上に浮んでいました。見れば、あのみにくい灰色の子も、いっしょに泳いでいます。

「あら、あの子はシチメンチョウなんかじゃないわ」と、おかあさんアヒルは、言いました。「まあ、まあ、足をとつてもじょうずに使つてゐること！ からだも、あんなにまっすぐ起してさ！ もう、あたしの子にまちがいないわ。それに、

よくよく見れば、やっぱりかわいいもの。ガー、ガー、——
さあ、みんな、おかあさんについておいで。おまえたちを、
世の中へ連れてってあげるからね。鳥小屋のみなさんにも、
ひきあわせてあげるよ。だけど、おかあさんのそばから離れ
ちやいけないよ。ふまれたりすると、たいへんだからね。そ
れから、ネコに気をおつけ！」

そのうちに、みんなは、鳥小屋につきました。ところが、
そこでは、おそろしいさわぎの起っている、まっさいちゅう
でした。二けんの家のものが、一つのウナギの頭を取りっこ
して、けんかをしていたのです。ところが、そのあいだに、
ネコが、横から取ってしまいました。

「いいかい、世の中って、こんなものなんだよ」と、アヒル
の子供たちのおかあさんは、言いながら、自分も、くちばし
をピチャピチャやりました。ほんとうは、おかあさんも、ウ
ナギの頭がほしかったのです。

「さあ、今度は、足を使うようにしましょうね」と、おかあ
さんアヒルは、言いました。「みんな、いそいで行けるかしら
ねえ。いいこと、あそこにいる、アヒルのおばあさんの前へ
行ったら、おじぎをするんですよ。あの方は、ここにいるひ
とたちの中で、いちばん身分の高いひとだからね。スペ
インで生れたひとなんだよ。だから、あんなにふとっていら
っしゃるのさ！ それから、ほら、足に赤い布をつけている
でしょう。きれいで、すてきじゃないの。あれはね、わたし
たちアヒルがもらうことのできる、いちばんりっぱな勲章くんしやうな
んだよ！ あれをつけているのはね、あのひとがいなくなら
ないようにというためと、動物からも、人間からも、すぐわ

かるようにいうためなんだよ。——

さあ、さあ、いそいで！ —— 足を内側へ向けるんじゃあ
りませんよ。おぎょうぎのいいアヒルの子は、足をぐっと、
外側へ開くんですよ。そら、おとうさんや、おかあさんを見
てごらん。いいかい、こんなふうにするのよ。さあ、今度は
首をまげて、ガー、と、言っごらん」

そこで、子供たちはみんな、言われたとおりにしました。
ほかのアヒルたちが、まわりに集まってきて、みんなをじろ
じろながめながら、大きな声で言いました。「おい、見ろよ。
また、チビが、うんとこさやってきたぞ！ おれたちだけじ
や、まだ足りないっていうみたいだ。チェツ、あのアヒルの
子は、ありゃあ、なんてやつだ。あんなのはごめんだぜ」
——そして、すぐに、一羽のアヒルがとんできて、その子の
首すじにかみつきました。

「ほっといてちょうだい」と、おかあさんアヒルは、言いま
した。「この子は、なんにもしないじゃないの」

「うん。だけど、こいつ、あんまり大きくて、へんてこだも
の」と、いま、かみついたアヒルが、言いました。「だから、
追っばらっちゃうんだ」

「かわいい子供さんたちだねえ、おかあさん！」と、足に布
をつけている、おばあさんのアヒルが、言いました。「みんな、
かわいい子供たちだよ。でも、一羽だけは、べつだがね。か
わいそうに。作りかえることができたら、いいのにねえ！」
「そうはまいりませんわ、奥さま！」と、おかあさんアヒル
は、言いました。「この子は、かわいらしくは見えませんが、
でも気だては、たいへんよいのでございます。それに、泳ぐ

ことも、ほかの子供たちと同じようにできません。いいえ、かえって、すこしじょうずなくらいでございますわ。大きくなれば、もうすこしきれいにもなりましょうし、時がたてば、小さくもなりますでしょう。きつと、卵の中に長くいすぎたものですから、こんなへんな形になってしまいましたのでしよう」こう言って、その子の首すじをつついて、羽をきれいになおしてやりました。

「それに、この子は男の子なんでございますもの」と、おかあさんアヒルは言いました。「ですから、かっこうのわるいなんてことは、どうでもいいことだと思えますわ。きつと、りっぱな強いものになって、生きていつてくれるだろうと、思います」

「ほかの子たちは、ほんとうにかわいいね」と、おばあさんアヒルは、言いました。「さあ、さあ、みんな。自分のうちにいるようなつもりで、らくにしておいで。それから、おまえさんたち、ウナギの頭を見つけたら、わたしのところへ持ってきておくれよ。いいかね」――

こう言われたものだから、みんなは、うちにいるように、らかな気持ちになりました。

けれども、いちばんおしまいに卵から出てきた、みにくいかっこうのアヒルの子だけは、かわいそうに、アヒルの仲間たちばかりか、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つかれたり、ばかにされたりしました。

「こいつ、でかすぎるぞ！」と、みんながみんな、こう言うのです。なかでも、シチメンチョウは、生れつきけづめを持っていたので、皇帝のようなつもりでいたのですが、それだ

けに、このアヒルの子を見ると、帆に風をいっぱい受けた船のように、からだをぷうつとふくらませて、つかつかと近づいてきました。そして、のどをゴロゴロ鳴らしながら、顔をまっかにしました。これを見ると、かわいそうなアヒルの子は、もうどうしたらよいか、わかりません。自分の姿が、たいそうみにくいために、みんなから、こんなにまでもばかにされるのが、なんともいえないほど悲しくなりました。

さいしょの日は、こんなふうにしてすぎましたが、それから、だんだんわるくなるばかりです。かわいそうに、アヒルの子は、みんなに追いかけられました。にいさんや、ねえさんたちさえも、やさしくしてくれるどころか、かえっていじわるをして、いつも言うのでした。

「おい、みつともないやつ。おまえなんか、ネコにでもつかまっちまえばいいんだ！」

おかあさんも、

「おまえさえ、どこか遠いところへ行ってくれたらねえ！」と、言いました。ほかのアヒルたちには、かみつかれ、ニワトリたちには、つつきまわされました。鳥にえさをやりにくる娘からは、足でけとばされました。

とうとう、アヒルの子は逃げだして、生垣いけがきをとびこえまして。すると、やぶの中にいた小鳥たちが、びっくりして、ぱつと舞いあがりました。

「ああ、これも、ぼくがみつともないからなんだなあ！」と、アヒルの子は思って、目をつぶりました。けれども、どんどんさきへ走っていきました。やがて、野ガモの住んでいる、大きな沼地に出ました。アヒルの子は、ここで、一晩ねるこ

とにしました。だって、ここまできたら、もうすっかりくたびれていましたし、それに、悲しくってたまらなかつたのですもの。

朝になると、野ガモたちはとびたつて、あたらしい仲間を見つけてました。「きみは、いったい何者だい？」と、みんなは、たずねました。アヒルの子は、あっちへもこっちへも、できるだけいてねいにおじぎをしました。

「きみはまた、おっそろしく、みっともないかつこうをしているな」と、野ガモたちは、言いました。「でも、そんなことは、どうだっていいや。ぼくたちの家族のものと結婚しなけりゃ、いいんだ」

かわいそうなアヒルの子は、結婚なんて、夢にも思つてみたことがあります！ それどころか、ただ、アシのあいだに休ませてもらつて、沼の水をほんのすこし飲ませてもらえば、それだけでよかつたのです。

アヒルの子は、そこに二日のあいだ、いました。すると、そこへ、おすのガンが二羽、とんできました。このガンは、卵から出て、まだ、いくらもたつていませんでしたから、すこしむてつぼうすぎました。

「おい、きみ！」と、ガンは言いました。「きみは、なんて、みっともないかつこうをしているんだ！ だけど、ぼくは、そのみっともないところが気に入つた。どうだい、いっしょに行つて、渡り鳥にならないかい？ じつは、この近くのもう一つの沼にな、きれいな、かわいい女のガンが二、三羽、住んでいるんだ。むろん、みんなお嬢さんさ。ガー、ガー、って、じょうずにおしゃべりすることもできるんだ。きみが、

いくらみっともないかつこうでも、そこへ行けば、幸福をつかむことができるんだぞ」——

「ダーン、ダーン！」と、そのとき、空で鉄砲の音がしました。とたんに、二羽のガンは、アシの中へ、まっさかさまに落ちて、死にました。水が、血の色でまっかにそまりました。

「ダーン、ダーン！」と、また鉄砲の音がしました。すると、ガンのむれが、アシの中から、ぱつととびたちました。つづいて、また鉄砲の音がしました。大じかけの猟が、はじまつたのです。かりゅうどたちは、沼のまわりを、ぐるりと取りまいていました。いや、中には、もつと近くまできて、アシの上へのび出ている木の枝に、腰をおろしている者さえ、二、三人ありました。青い煙が、まるで雲のように、うす暗い木々の間をぬけて、遠く水の面にたなびいていました。

沼の中へ、猟犬が、ピシャツ、ピシャツと、とびこんできました。アシは、あっちへもこっちへも、なびきました。かわいそうに、アヒルの子にとっては、なんといいおそろしい出来事だつたでしょう！ アヒルの子は、びっくりぎょうてんしました。思わず、頭をちぢこめて、羽の下にかくしました。

と、ちょうどその瞬間、おそろしく大きなイヌが、すぐ目の前にとび出してきました。舌はだらりと長くたらし、目はぞつとするほど、キラキラ光っていました。鼻づらを、アヒルの子のほうへぐつと近づけて、するどい歯をむきだししました。——

ところが、どうしたというのでしょうか。アヒルの子にはかみつきもしないで、また、ピシャツ、ピシャツと、むこうへ

もどって行ってしまいました。

「ああ、ありがたい！」と、アヒルの子は、ほっとして、言いました。「ぼくが、あんまりみっともないものだから、イヌまでかみつかないんだな」

アヒルの子は、そのまま、じっとしていました。けれど、そのあいだも、ひっきりなしに、鉄砲のたまが、アシの中へとんできて、ザワザワと音をたてました。

お昼すぎになってから、やっと、あたりが静かになりました。けれども、かわいそうなアヒルの子は、すぐには、起きあがる元気ありませんでした。それから、また、だいぶ時間かたつてから、やっと、あたりを見まわしました。そして、大いそぎで、沼から逃げ出しました。畑をこえ、草原をこえて、どんどん走っていききました。そのうちに、はげしい風が吹いてきました。そのため、今度は、とつても走りにくくなりました。

夕方ごろ、とあるみすばらしい、小さな百姓ひやうけいしやうや家にたどりつきました。その家は、見るもあわれなありさまで、自分でも、どっちへたおれようとしているのか、わからないようなようすでした。それでも、まだ、とにかく、こうして、立っているのです。そうしているうちにも、風が、ピューピュー吹きつけてきました。アヒルの子は、たおれないようにするために、風のほうへしっぽを向けて、からだをささえなければなりません。けれども、風は、ますますひどくなるばかりです。そのとき、ふと見ると、入り口の戸のちようつがいがつはずれていて、戸が、いくぶん開いています。どうやら、そのすきまから、部屋の中へ、はいつていくことができそう

です。そこで、アヒルの子は、さっそく、そこからはいつていきました。

この家には、ひとりのおばあさんが、一ぴきのネコと、一羽のニワトリといっしょに、住んでいました。おばあさんは、このネコのことを、「坊やちゃん」と呼んでいました。「坊やちゃん」は背中をまるくしたり、のどをゴロゴロ鳴らしたりすることができました。そのうえ、火花を散らすこともできました。もっとも、火花を散らすためには、だれかに、毛をさかさにこすってもらわなければなりません。ニワトリは、たいへんかわいらしい、短い足をしているので、おばあさんは、「短い足のコッコちゃん」と、呼んでいました。「短い足のコッコちゃん」は、とつてもよい卵を生むので、おばあさんは、まるで、自分の子供みたいなのに、かわいがっていました。

あくる朝になると、ネコも、ニワトリも、すぐに、いままで見たことのない、アヒルの子がいるのに気がつきました。ネコは、のどをゴロゴロ鳴らし、ニワトリは、コッコと鳴きだしました。

「どうしたんだね？」と、おばあさんは言つて、あたりを見まわしました。けれども、おばあさんは、目があんまりよくなかったものですから、このアヒルの子を、どこからか迷いこんできた、ふとつたアヒルだと、かんちがいしてしまいました。

「こりゃあ、いいものはいつてきてくれた」と、おばあさんは言いました。「これからは、アヒルの卵も食べられるってわけだもの。だけど、おすのアヒルでなければいいがねえ。まあ、ためしに飼つてみるでしょう」

こういうわけで、アヒルの子は、三週間のあいだ、ために飼われることになりました。でも、もちろん、卵は生みませんでした。ところで、この家では、ネコがご主人で、ニワトリが奥さんでした。そして、いつもふたりは、「われわれと世界は！」と、言っていました。なぜって、ふたりは、おたがいが世界のよいはんぶんで、それも、いちばんよいはんぶんだと、思っていたからです。アヒルの子は、これとはちがったふうに考えることもできるような気がしました。でも、ニワトリは、それをみとめてくれませんでした。

「あんたは、卵を生むことができるの？」と、ニワトリはたずねました。

「いいえ」

「じゃあ、だまっていたらどう！」

すると、今度は、ネコが口を出しました。

「おまえは、背中をまるくすることができるかい？ のどをゴロゴロ鳴らすことができるかい？ それから、火花を散らすことができるかい？」

「いいえ」

「じゃあ、りこうな人たちが話しているときは、だまっているものだよ」

こうして、アヒルの子は、すみっこにひっこんでいましたが、ちつともおもしろくはありません。そうしているうちに、すがすがしい、気持のよい空気と、お日さまの光が、なつかしく思い出されてきて、たまらないほど、水の上を泳ぎたくなってきました。アヒルの子は、とうとう、がまんができたくなって、そのことを、ニワトリの奥さんにうちあけました。

「あんた、何を言うのよ」と、ニワトリの奥さんは、言いました。「なんにもすることがないもんだから、そんなとんでもない気まぐれを起すんだよ。卵でも生むとか、のどでも鳴らすとかしてごらん。そんなばかげた気まぐれは、どっかへとんでっちゃうから」

「でも、水の上を泳ぐのは、すばらしいですよ」と、アヒルの子は言いました。「頭から水をかぶったり、水の底のほうまでもぐっていったりするの、とっても楽しいですよ」

「ふん、さぞかし、楽しいでしょうよ」と、ニワトリの奥さんは、言いました。「あんたは、気でもちがったんだよ。じゃあ、ネコのだんなさんに聞いてごらん。あのひとは、あたしの知っている人の中で、いちばんりこうな方だがね、あのひとに、水の上を泳いだり、もぐったりするのは、お好きですかって、さ！ あたしは、自分のことはなんにも言いたかないわ。——あたしたちのご主人のおばあさんにも、聞いてごらん。あのおばあさんよりりこうな人は、世の中にはいないんだよ。あんた、いったい、あのおばあさんが、泳いだり、水を頭からかぶったりするのが好きだとしても、思うの？」

「ぼくの言うことが、あなたにわたしには、おわかりにならないんです！」と、アヒルの子は、言いました。

「ふん、あたしたちにおまえさんの言うことがわからなければ、いったい、だれにならわかるっていうの？ あんた、まさか、ネコのだんなさんや、あのおばあさんよりも、自分のほうがりこうだなんて、言うんじゃないだろうね。まあ、あたしは、別にしたところでき！ あんまり、なまいきなことを言うんじゃないよ！ 子供のくせに！ そんなことばかり

言っていないで、まあ、まあ、ひとが親切にしてくれたことも、ありがたく思うんだね。

あなたは、こうして暖かい部屋に入れてもらって、あたしたちの仲間に入れてもらったんじゃないか。おまけに、いろんなことまで、教えてもらったんじゃないの！ それなのに、あなたはまぬけよ！ あたし、あなたなんかとつき合ってる、おもしろかないわ。だけど、さ、ね！ あたしはあなたのことを思うからこそ、こんないやなことまで言ってしまうのよ。だから、ほんとのお友達ちというものさ。さあ、さあ、これからは、いっしょうけんめいに、卵を生むとか、のどをゴロゴロ鳴らして、火花でも散らすようにするといいわ！」「でも、ぼくは、外の広い世の中へ、出ていきたいんです！」と、アヒルの子は、言いました。

「それなら、かってにおし！」と、ニワトリの奥さんは、言いました。そこで、アヒルの子は出ていきました。そして、楽しそうに水の上を泳いだり、水の中にもぐったりしました。けれども、姿がみにくいために、どの動物からも相手にされませんでした。

やがて、秋になりました。森の木の葉は、黄色や茶色になりました。強い風が吹いてくると、木の葉は、くるくると舞いあがりました。高い空のほうは、寒々としていました。雲は、あられや雪をふくんで、どんよりと、たれさがっていました。生垣の上には、カラスがとまって、いかにも寒そうに、カー、カーと、鳴いていました。考えてみただけでも、ぶるぶるっとしそうな寒さです。こんなとき、あのアヒルの子は

どうしていたでしょうか。かわいそうに、すっかり弱っていました。

ある夕方、お日さまが、キラキラと美しくかがやいて、しずみました。そのとき、アヒルの子がまだ見たこともないような、美しい大きな鳥のむれが、茂みの中からとびたちました。みんな、からだじゅうが、かがやくようにまっ白で、長い、しなやかな首をしています。それは、ハクチョウたちだったのです。ハクチョウのむれは、ふしぎな声をあげながら、美しい大きなつばさをひろげて、寒いところから暖かい国へいこうと、広い広い海をめがけて、とんでいくところでした。ハクチョウたちは、高く高くのぼって行きました。

それを見ているうちに、みにくいアヒルの子は、なんともいえない、ふしぎな気持ちになりました。それで、水の中で、車の輪のように、ぐるぐるまわると、首をハクチョウたちのほうへ高くのばして、自分でもびっくりするほどの、大きな、ふしぎな声をあげて、さけびました。ああ、なんと美しい鳥でしょう！ あの美しい鳥、幸福な鳥を、アヒルの子は、けっして忘れることができませんでした。

ハクチョウたちの姿が見えなくなると、みにくいアヒルの子は、水の底までもぐっていきました。けれども、もう一度浮びあがったときには、まるで、むがむちゅうになっただけです。アヒルの子は、あの美しい鳥がなんとという名前なのか知りません。そして、どこへとんでいったのかも知りません。けれども、いままでのどんなものよりも、いちばんつかしく思われるのです。なんだか、好きで好きでたまらないのです。でも、うらやましいなどは、すこしも思いませんでし

た。アヒルの子にしてみれば、あんな美しい姿になろうなんて、どうして願うことができましょう。ただ、ほかのアヒルたちが、自分を仲間に入れてくれさえすれば、それだけで、どんなにうれしかしいかなのです。——ああ、なんてかわいそうな、みにくいアヒルの子でしょう！

いよいよ、冬になりました。ひどい、ひどい寒さです。アヒルの子は、水の面おもてがすっかりこおってしまわないように、ひっきりなしに、泳ぎまわっていなければなりません。だけれども、一晚、一晚とたつうちに、泳ぎまわる場所が、だんだんせまくなり、小さくなりました。あたりは、まもなく、ミシミシと音をたてるほど、こおりついてきました。アヒルの子は、氷のために、泳ぐ場所をみんなふさがれてしまわないように、しょっちゅう、足を動かしていなければなりません。でも、とうとうしまいには、くたびれきって、動くこともできなくなり、氷の中にとじこめられてしまいました。

つぎの朝早く、ひとりのお百姓さんが通りかかって、あわれなアヒルの子を見つけました。お百姓さんは、すぐさま、そばへやってきて、木靴きくつで氷をくだいて、家のおかみさんのところへ持って帰りました。こうして、アヒルの子は生きかえりました。

お百姓さんの子もたちは、大よろこびで、アヒルの子とあそぼうとしました。ところが、アヒルの子のほうは、またいじめられるにちがいないと思って、こわくてこわくてたまりません。で、あんまりびくびくしていたものですから、ミルクつぼの中へとびこんでしまいました。おかげで、ミルク

が、部屋じゅうにとび散りました。おかみさんは大声でわめきたてて、両手を高く上げて、打ちあわせました。それで、アヒルの子は、またびっくりしてしまい、今度は、バターの入れているの中にとびこみました。それから、ムギ粉のおけの中へとびこんで、そのあげく、やっとのことで、とび出してきました。いやはや、たいへんなさわぎです！ おかみさんは、きんきんした声でさけびながら、火ばしで、アヒルの子をぶとうとしました。いっぼう、子供たちは子供たちで、アヒルの子をつかまえようとして、ぶつかりっこをしては、笑ったり、わめいたり。いやもう、たいへんなことになりました！ ——

ところが、ありがたいことに、戸があけはなしになっていました。それを見るが早いか、アヒルの子は、いま降ったばかりの雪の中の、茂みの中へ、とびこみました。——そして、まるで冬眠でもしているように、そこに、じっとしてしまいました。

さて、このあわれなアヒルの子が、きびしい冬のあいだに、たえしのばなければならなかった、苦しみや、悲しみを、みんなお話ししていれば、あまりにも悲しくなってしまう。—— やがて、いつのまにか、お日さまが、暖かくかがやきはじめました。そのころ、アヒルの子は、まだやっぱり、沼のアシのあいだに、じっとしていました。もう、ヒバリが歌をうたいはじめました。——いよいよ、すてきな春になったのです。

そのとき、アヒルの子は、きゆうに、つばさを羽ばたきました。すると、つばさは前よりも強く空気をうって、からだ

が、すうっと持ちあがり、らくらくとどぶことができました。そして、なにがなんだか、よくわからないうちに、とある大きな庭の中に来ていました。庭には、リンゴの木が美しく花を開き、ニワトコはよいにおいをはなつて、長い緑の枝を、静かにうねっている掘割りのほうへ、のぼしていました。ああ、ここは、なんて美しいのでしょうか！ なんて、あたらしい春のかおりに、みちみちているのでしょうか！

そのとき、目の前の茂みの中から、三羽の美しい、まっ白なハクチョウが出てきました。ハクチョウたちは羽ばたきながら、水の上をかるやかに、すべるように、泳いできました。アヒルの子は、この美しいハクチョウたちを知っていました。そして、いまその姿を見ると、なんともいえない、ふしぎな、悲しい気持ちになりました。

「ぼくは、あの美しい、りっぱなハクチョウたちのところへとんでいこう。けれど、ぼくはこんなにみにくいんだから、近よっていったりすれば、きっと殺されてしまうだろう。でも、いいや。どうせ、ぼくなんかは、ほかのアヒルからはいじめられ、ニワトリからはつつつかれ、えさをくれる娘からは、けとばされるんだもの。それに、冬になれば、いろんな悲しいことや、苦しいことを、がまんしなければならぬんだもの。それを思えば、ハクチョウたちに殺されるほうが、どんなにいいかしれやしない」こう思って、アヒルの子は水の上にとびおりに、美しいハクチョウたちのほうへ、泳いでいきました。これを見ると、ハクチョウたちは、美しく羽をなびかせながら、近づいてきました。

「さあ、ぼくを殺してください」と、かわいそうなアヒルの

子は、言いながら、頭を水の上にたれて、殺されるのを待ちました。——ところが、すみきった水の面おもてには、いったい、何が見えたでしょうか？ そこには、自分の姿がうつっていました。けれども、それはみにくくて、みんなにいやがられた、かっこうのわるい、あの灰色の鳥の姿ではありません。それは、美しい一羽のハクチョウではありませんか。そうです。ハクチョウの卵からかえったものならば、たとえ鳥小屋で生れたにしても、やっぱり、りっぱなハクチョウにちがいないのです。

アヒルの子は、いままでに受けてきた、さまざまの苦しみや、悲しみのことを思うにつけて、いまの幸福を心からうれしく思いました。そして、いまの自分に与えられている幸福や、すばらしさが、いまはじめてわかりました。ほんとうに、なんてしあわせなことでしょう！ ——大きなハクチョウたちは、このあたらしいハクチョウのまわりを泳ぎながら、くちばしで羽をなでくれました。

そのとき、小さな子供たちが二、三人、お庭の中へはいってきました。みんなは、パンくずや、ムギのつぶを、水の中へ投げてくれました。そのうちに、いちばん小さい子が、大声でさげびました。

「あっ、あそこに、あたらしいハクチョウがいるよ！」すると、ほかの子供たちも、いっしょに、うれしそうな声をあげました。

「ほんとだ。あたらしいハクチョウがきた！」

みんなは、手をたたいて、踊りまわると、おとうさんとおかあさんのところへ駆かけていきました。それから、またパン

やお菓子を投げこんでくれました。そして、だれもかれもが、言いました。

「あたらしいハクチヨウが、いちばんきれいだね。とても若くて、美しいね」

すると、年上のハクチヨウたちが、若いハクチヨウのまえに頭をさげました。

若いハクチヨウは、はずかしさでいっぱいになり、どうしてよいかわからなくなつて、頭をつばさの下にかくしました。ハクチヨウは、とてもとても幸福でした。でも、すこしも、いばったりはしませんでした。心のすなおなものは、けつして、いばったりはしないものなのです。ハクチヨウは、いままで、どんなにみんなから追いかけられたり、ばかにされたりしたかを、思い出しました。けれども、いまは、みんなが、自分のことを、美しい鳥の中でもいちばん美しい、と、言ってくれているのです。ニワトコは、水の上のハクチヨウのほうへ枝をさしのべて、頭をさげました。お日さまは、それはそれは暖かく、やさしく照っていました。ハクチヨウは、羽を美しくなびかせて、ほっそりとした首をまっすぐに起しました。そして、心の底からよろこんで言いました。

「ぼくがみにくいアヒルの子だったときには、こんなに幸福になれようとは、夢にも思わなかった！」